日本の近代土木遺産
渓谷で１世紀堪える

松室大橋（まつむろ）

明治 35 年（1902）山陽本線開通。その３年後に徳山海軍練炭製造所が設置され、大正６年（1917）造船・造機の工場建設、同７年に日本曹達が建設されるなど、周南地域の社会経済構造は転換期を迎えていました。

こうしたなか山口県は低価格な電力を供給して県内産業の発展を図るため、錦川での電気事業の企画・調査に取り掛かっていました。大正９年 12 月「錦川の水を利用して県営電気事業を企画経営せむことを建議す」と山口県議会は満場一致で採択後、山口県は錦川水利使用出願に関する提案を行い、議会の可決を得たのでした。こうして大正 11 年６月都濃郡須金村（現・周南市）でトンネル工事が着工され、山口県による県営電気事業第１号の錦川第一発電所の歴史が始まったのでした。

大正 13 年 12 月４日錦川第一発電所の竣工式と同時に第二発電所の起工式が行われ、その後も県営電気による新設や他事業者の買収、出力の増加等で、当初の低価格な電力供給は実現されていきました。昭和 17 年の山口県電気局の解散時には 13 発電所でしたが、錦川第一・第二は主力発電所でした。

菅野ダムから国道 434 号を少し走り、視界が開けたところで錦川第一発電所と赤い鋼橋が見えます。これが近代土木遺産の松室大橋です。長さ 41.5 m、幅員 4.1 mで下路曲弦ポニーワーレントラスの橋は、プラットトラスに比べて剛性が大きく、鋼材料も少なくてすむ利点があります。また上横構がないため、輸送荷物の高さ制限も不要です。

数年前まであった「大正９年 11 月、日本橋梁株式会社製作」の銘板が物語るように、大正９年に建設された位置で現存する鋼単純トラス橋（車道橋）ではわが国で２番目に古い橋です。ただ、１番古いとされていた平山橋が歩道橋に変わったため、車道橋としては１番ともいえます。発電所工事用の材料を載せた車がこの橋を通ったことを思うとき、周南地域の産業発展に寄与した錦川第一発電所とともにその功績は計り知れないと思われます。今日のような質の高い材料や高度な技術がない時代に造られた橋が１世紀の間風雪に耐える様をみると、先人の叡智に頭がさがります。

■位置図

松室大橋　下路単線曲弦ワーレントラス（橋長 41.5 m　幅員 4.1 m）

建設された位置で現存するものとしては日本で２番目に古い

国道 434 号から見る錦川第一発電所と松室大橋